

京都支部報

大学図書館問題研究会京都支部

No. 10
1980.12.11

〒606
左京区吉田本町
京大経済学部
図書室沢居敷付
75-2111 (3412)

- 目
- ① 大学図向研・京都支部第3回
支部総会ひらかれる
 - ② 京都支部会計報告について
 - ③ 支部委員紹介
 - ④ 機械化研究小グループの活動
報告
 - ⑤ レポート 一 中央大学図書館を
見学して 一

次

「読書人と書評」 -1-

京大・文学部図書室

篠原俊夫

《12月例会》

滋賀県立図書館・滋賀医大図書館見学会

日時 12月18日(木) 午後1時半・国鉄瀬田駅集合
新築なた滋賀県立図書館の活動ぶりと、医学図書館における情報サービスの実際をくわしくみます。

《新年研究集会(京都・大阪会場 両部合同例会)》

吉澤敏生氏の講演有ります。

日時 1981年1月17日(土)

会場 大阪府立労働センター(天満橋下車西)

Ⅳ 大学図向研・京都支部第3回支部総会 ひらかれる

第3回支部総会は11月15日（土）、龍谷大学でひらかれました。7大学、16名の会員（府大1、府立医大1、農大3、京大8、立命1、工大1、滋賀医大1）が集まり、支部長あいさつ（大学図づくりの基本方向）、報告（経過報告、方針案、研究企画について）、全国委員会からの報告をうけ、各大学の実情をもとに討論をおこないました。

① 支部長あいさつ

支部では、この1年大学図政策がどのように動いているのかを、研究してきた。今、大学図の動きは、学術審議会答申「今後における学術情報システムの在り方について」がバイブルになっており、文部省の政策は、そのを参考する基準が答審答申で、上から下へ流れるだけで、なかなかいい、いろいろな問題、つまり現場的な発想がうすれてきている。

大学図研では現場的な発想を組織し、この中から機械化、コンピュータ化を考え、現場の状況を武器にして、答申路線を参考なければならない。現場の要求に依拠し、研究者の要求を大事にすると同事に、研究に偏重することを克服しなければならない。

② 全国委員会から

- i 今、文部省が大学図の利用者調査をまとめる計画があり、京都支部として、京都大学での調査をおねがいしたい。
- ii 来年の4月26日予定で、「学審答申とその後」についてのパネルディスカッションを計画している。
- iii パンフレット「配転問題」をもとにし、議論しよう
- iv 図の自由宣言、図量の倫理綱領、をひろめ議論しよう

v 地域の情報をよくつかもう。

vi 大学図内研事務局の両面への移行問題については、結論を年内に出してほしい。

vii 金費の納入を確實に行ってほしい。

(3) 討論の内容

■近畿地区国公立協議会の会議が議題としてひらかれたことを見て、田の菅理者は、学審答申に答えることが至上命令になっており、そこにのみ目をむけていることが感じられた。その場では、学生の問題はないし、人文社会系をどうするか等、現場の中のいろいろな問題が正しく反映されていない。

小川：大学は、他大学の資料を使えないかという OUT PUTのみを考え、自館で資料を集めることを考えないようになっている。資料獲得（研究者の本当に必要なものを集める）を全面にたててやるべきだ。（府立大）

■大型計算機センターから年末に金があつたからERICを使わないかと言められ、「'79, '80年のERICを使用しているが、検索にお金がかかる。お金のない講座は利用者の私費でやらなければならず」、情報を得るにお金がいるようになってきた。「過金の原則」が文部省で認められており、「無料が原則」であるが利用するのに金がいる。通信費を安くさせるとか、有料の問題を考える必要があるのではないか。（京大・教育学部図書室）

■京都大学における学術情報システムの在り方について（中南答申）が8月につくられ、10月に総長に提出された。これをつくったメンバーは、京大学術情報問題調査検討委員会で、委員長が附属図書館長、委員が大型計算機センター長、情報処理教育センター長、工学部教授、数理解析研究所教授、大型計算機センター助教授、幹事が附属図書館事務部長、統括、整

理、南図各課長から成っており、秘密裏にあこなわれている。

京大附属図書館新館問題については、現在地の建てかえと移転の事が、む実な問題となっている。3年内利用出来ない事と、当面の移転が、複数が法規装置、整理と総合目録が「理学部にゆきかれるため、利用者と職員から代替地の要求がでて」いる。これをすべて秘密にあこなわせ、利用者と館員たにつきあらされていないところに大きな問題がある。(京大・附属団)

■文学部の学生が新聞に「図書館についての不満」を投書した。文科系の資料を最も豊富にもつていいる附属図書館が「新館建設で3年内利用制限をすれば、一番困まるのは文学部の学生・院生である。(京大・文学部団)

■学生の投書は当然のことである。京大で昼夜み開館していない図書室があると聞いていますが、たとえば京大の経済学部図書室なんかはどうですか(龍大)

■経済学部図書室は昼夜みは開館はしていないが、場所は貸しています。人不足の中で整理を含め、利用者と接しよくする意味で、閲覧準備をやってゆこうと提案したことがあります。何となく勢力強化だということでまとまりませんでした。個人的には昼夜みの開館でも、整理と閲覧がローテューションをくめば可能だと思うのです。(京大・経済学部団)

■一筋の者として昼夜みは当然必要だが、団の立場を考えると昼夜み開館するのには当然。立命は2部があるので平日団はこれない学生のために、日曜日も開館している。京大の学生も来てますよ。(立命)

■閲覧時間の問題にかかりらず、学生と図員の関係、学生に対する図員のサービスのやり方を考える必要がある。映画「団と子どもたち」を見て、団のサービスとは何かが再認識させられた。(京大経済学部団)

■私のところでは、職員5名が交代で昼休みもサービスをしています。相互貸借の仕事をやっていて、雑誌が少ないので、他大学の資料にたよっています。しかし、所在情報を見つけるのに時間がかかる。だからネットワークはほしいと思いました。(府立医大)

■今までの議論を聞いて、大学図書館の活動「利用者とともに」の姿勢が求められていると思う。私の経験では、とりあえず2名で交代で昼休み、閲覧室を開けることを実行した。今ではみんなでローテーションを組んで行っている。できるところから進めるべきだ。学生の意識、要求をどうつかむかが「大学図書館の課題だ」。(龍大)

■利用者調査を最大限活用し、図活動をいかすべきだ。(京大)

■機械化することによってサービスがおしつぶされそうな問題もある。(工織大)

■今のネットワークシステムについては話題にはしてないが、じっとにらんでいる状態である。「過金の原則」この問題を具体的に教員に提案することを考えている。昼休みの廻館については、府立大でも交代でやっている。学生と接しよくしないと学生との関係はよくならない。日常的な学生との接しよくは大切であり、立命みたいに組織的に集約されることが大事だ。(府立大)

■組織問題について

■図員とは何か? 図員がどう生きるか等、このような問題に感心が強い中で、「データベースの紹介」等、魅力ある活動もし、人を集めて、大学図書館京都支部を大きくする必要がある。

■全国委員会から提案された、事務局を廻西へ移行する問題については、

京都支部としては積極的にひきうける気がままで、とりくむ必要がある。しかし、一府県だけでやれるものではない。やはり、近畿全体としてとりくむ体制ないと無理である。

以上、討論の後、採決、新支部委員選出、京都市立図書館の問題で特別決議が通され、生き生きとした活動をするために、現場に根を下ろした研究活動を行うことを確認し、第3回支部総会をおわりました。

② 京都支部会計報告について

収入の部	支出の部
前期繰越金 67,780	会場費・消耗品費 13,155
支部還元金 30,800	通信費 4,366
懇親会残金 500	講師謝礼 7,000
利息 908	ファックス原紙 7,400
<hr/> 99,988	<hr/> 68,067
	99,988

③ 支部委員紹介

酒井忠志（府立大）	篠原俊夫（京大）
成山雅康（龍大）	白神順子（京大）
沢居紀充（京大）	堤嘉範（京大）
大沢紀子（京大）	平元健史（工織大）
小平年明（立命大）	岩本速雄（滋賀医大）
	（同志社）

図 機械化研究小グループ活動報告

大学図書館京都支部の機械化研究小グループでは、データベースについての研究を行っています。12月6日(土)、工研大で、京大・大型計算機センターの喜田昇氏を講師として、「一般的データベース使用における有用性について」のテーマで研究会をひらきました。

来年度の研究予定は、FAIRSでは京大のLC・MARCデータベース、JAPAN-MARCデータベース使用可能ですので、FAIRSにて両MARCの具体的な例から、MARCそのものの研究及び、データベースの研究、そして、そのデータベース使用による情報検索の必要性と意義について研究してはどうかと想っています。

⑤ レポート — 中央大学図書館を見学して — <京大 場>

電車がはしってはいる図書館として有名な中央大学図書館は、キャンパスにおける総合計画の一環として設計され、これまでの図書館の常識をこえたいくつかの新しい試みがなされ建てられている。

その新しい試みとは、職員数を増さないで済むという図書館運営のための省力化である。そして、10万冊ある蔵書はすべてカーペットが敷かれている。机とイスは中央大学型といわれている特別法典で、座りやすく、型もシンプルで、しかも50年くらいはもつとう合板で作られたものである。かなり場所をとるロッカーと拿立てをいっさいなくし、その費用をうかして家具類に費やしている。

ここで機械化は、省力化とノーエック方式で図書館を管理し、利用者にサービスするためのもので、テレリフト(自走式搬送設備)、つまり書庫内をはしる電車、資料連絡テレビ、監視用テレビ、システムリー

ブ（マイクロフィルム自動出納機），ファクシミリが施設されている。

テレリフトは2層の広い書庫内を常に走っているモノレールのような電車で，電話帳が3冊入るくらいの大きさのボックスに図書を入れて各受付まで運ぶしくみになっている。開架閲覧室では一キエック方式のため，お金にして200万円ぐらゐの図書がなくとも，そのための入館料1人300万円を使うより安いといふことで，図書はすべて消耗品あつかいになり，資産台帳にのっていない。このような事は国立大学では全く考えられないことである。各階の受付には資料連絡テレビが置かれてあり，カードや図書をじかにテレビに写して連絡出来るようになっている。システムトリークは蔵書が増えても書庫を増やすスペースがないところから，マイクロフィルム化された図書の検索を自動出納するために施設しているものである。このせまいスペースの中には15万リール（図書冊数にして100万冊）が収まる。

学生の利用は駒河台時代と比べると4割から6割に増えている。学部，研究室図書室を含め，専任教員64名，アルバイト7名で，サービスしている。図書館システムを集中化して，大学自体がひと壁はなれた所にあるため，行くところがない学生にとって図書館は快適な場所であり，学生にとって非常に便利に出来ている。しかし，一方研究者に対しては専門的なサービスが充分出来ていない。これは一橋大学と比べて対象的である。国立と私立の違いもあって，中央大学型と同じような機械化をそっくり国立大学にあてはめる事は出来ないであろうが，利用者が一キエックで図書館を利用出来る事は大いに評価したい。

読書人と書評 -1-

京大・文学部図書室
篠原俊夫

1. 「書評」を取りあげることの意味

「読書人」を具体的に定義することは難しいが、一応、図書館員や学生、研究者、又は趣味的な読書家を含めて、日常的に読書を必要としている人を想定する。

読書人は当然、自分が必要とする資料を入手するために、常に新しい情報を追い求めている。書物に関する種々の情報の中で大切なもののひとつで、かつ身近に求め得るものに〈書評〉があげられる。事実、われわれちはそれと意識せずに多くの書評を読みながらしている。毎週の新書評、週刊紙、月刊紙の書評、書評専門紙の書評等、多くの図書館人は、日常生活の中でも半ばは職業上の必要と半ばは無意識の習慣から、読んでいる。

しかし、多くの図書館人にとって、書評は余りにも身近な存在であるために友って、書評のあり様を意識的にとらえなあしてみる機会は意外に少ないようと思われる。

〈書評の科学〉とまではいかぬまでも、書評の現状を分析し、その問題点を指摘することは、可能ではあるまいか。更には、持続的な展望として、〈望ましい書評ジャーナリズム〉を育成するために、いかなる条件が整えられる必要があるのか、図書館人として何ができるのか、これらの問題をひっくるめて、「書評の現在」を考えてみたい。

2 書評ジャーナリズムの不振

日本における書評ジャーナリズムの不振がよく言われる。原因はさまざまあげられている。自分が選ぶ本しか信用しないという日本のインテリの悪しきオリツナリティ主義(桑原武夫の説)。出版資本の圧力を大なり小なり受ける書評家が糧道を断たれる心配から公正な批評をさすを控える風潮。経済的にほとんど"むくめぬない"間に書評家は時間とエネルギーを要求されると、いう深刻な矛盾。あるいは日本語の特徴そのものが論理性に欠け、批評の言語として不向きであること(外山滋比古の説)。そのいずれもが原因となって、日本の書評の不振をまねいている。

書評家はひたすら無難な批評を心がける。批評というより紹介に重点をおく。その結果は、ごますり批評、ちようちん持ち批評、仲間ばめ批評、学園意識まるだし批評が横行し、書評の信頼度はとめどなく低落する。批評への信頼度について言えば、似たようなものには映画評や音楽(レコード)評がある。検断と偏見の非難は承知のうえで"言うのだが"、少數のにある映画雑誌や映画批評家を除いて、映画評の大部分が、ただのちようちん持ち記事の羅列であり、映画会社の代言人にすぎぬ映画批評家のおきまりのはめ言葉にすぎないことは、熱心な映画ファンの間では、今や常識となってしまっているらしい。

部厚さを誇る音楽雑誌のレコード評など読んでみても、ほとんど、にたりよつたりのいいかげんな語彙がならんでいるばかりである。本当にすぐれた書物のありかを読者にさし示してくれる書評、本当にみたい映画を教えてくれる映画評、かけ値なしの名演奏を指摘した音楽評を求めるのは、もはや、かなめ原更いになってしまったのか。

書籍の著者問題

第2回 研究会
集会研究

○ 講演 岩袁敏生氏
(関西大学教養) (日本図書館学会講堂)
日本生命研修所 (大阪・中之島)(阪大病院前)

とき 1981年1月17日(土) 2時~5時

大学図書研究会
京都支部
東京支部
大阪支部
兵庫支部

○ 研究会など懇親会にはいります。

○ 制題は、新規一義の著者問題を提起しました。今回は、ながらく
大学図書館政策の立場に立って、明らかにした岩猿敏生先生をかた、大学図
書館の著者問題を大きく展望していくたいともいいます。